

◆ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

幼いころからずっとフィギュアスケートを続けていた輪だが、ある事情でしばらくスケートをはなれていた。その後、バイクの事故で入院していた元選手の信兄ちゃんにスケートを再開したと伝えに来た場面である。

「いや、ほんま、輪がスケートに戻ってくれて、ほんまに良かった。おれな、輪がやめたんはおれのせいなんやと思って、昔の話をしたこと、めっちゃ後悔してたんや。いまさらあんなこと人に言うてもしやらないのに、輪を惑わすような話、してしてもて……」

「ちやうって、やめたんは、信兄ちゃんのせいやないよ」
 信兄ちゃんの話をしきぎって、首をブンブン横に振った。
 やめたきっかけはあの話聞いたことだったけど、^① やめたいと思ったのは、それだけが原因じゃなかったから。信兄ちゃんが気に病む必要なんて全然なかったのに。おれがずっと病院に顔を出さなかったせいで、信兄ちゃんはずっと自分のせいだと思って自分を責めてたなんて。

「兄ちゃん、ごめんな。おれがスケートやめたんは、兄ちゃん

10

5

んのせいやない。自分に自信がなかったからなんや。自分がスケートが好きなのか……スケートのためならどんな努力でもできるほどスケートが好きなんか、わからへんようになったとしてもたから、続けていく自信がなかったんや。だから、スケートやめて、遊んでみたり、もつと熱中できること探してみたりしたけど……見つからへんかった。昨日からリンク戻ったけど、ほんとはまだ自信ないし、ようわからへんねん」

あかん。謝ろうと思ってるのに、ちゃんと謝れてないし。そもそも「大丈夫やで」って言いに来たはずなのに、なんでか「自信ないし、ようわからへん」とか言うてるし。こんなんじや、信兄ちゃん安心できへんやないか。自分のダメさに嫌気がさして、^② 泣きそうになって目を伏せた。

信兄ちゃんの大きな手がふわりと頭に載せられて、くしゅつと髪をかき乱すように撫でてくれた。顔を上げると、やさしい笑顔が見下ろしてくれていた。

「大丈夫や。輪は自信持ってスケートを続けろ。おまえには才能があるんやからな」

「才能？」

「輪は体がめっちゃ柔らかい。筋肉にも関節にも柔軟性がある。体が柔らかいと怪我をしにくいし、いろんなポジションがきれいにとれるし、他の人にはできへん大技も決められる。ビールマンสปิน、関西のジュニア男子でで

35

30

25

20

きるのん、おまえだけやる?」

「うん」

すべて納得はできてないんだけど、問いの答えはYESなので思わず大きくうなずいていた。体が柔らかいだけで、それで才能あるって言えるんだろうか。膝が柔らかいから着氷がきれい、とはよく言われるけど、それだけじゃジャンプは跳べない。高く跳べる才能とかのほうが大事なんじゃないのかな。

「最近、大会の順位とかで思うような結果が出なくて、それで自信が持たれへんいうのもあるかもしれへんけど、そんなの気にすることない。今の輪の滑りは完成品やない、成長過程にすぎないんや。体の成長が止まる頃までに、体にとれだけの技術を吸収して、心がとれだけ成長してるか。それが大事なんや。途中、伸び悩む時期もあるけど、そこで萎縮してしまわんと、未来を信じて努力を続けるんや。そうしたら、必ず未来は拓ける。今の佑志をみてたら、おれの言うてること理解できるやろ?」

佑兄ちゃんは中学や高校の頃は、全国でトップになるような選手じゃなかった。西日本ではだいたい信兄ちゃんがトップクラスで、佑兄ちゃんは三、四番手。全国大会に行くとき表彰台には乗れない七、八番手レベルだった。でも、高三のシーズンからめきめき成績が伸びて全日本ジュニア・チャンピオンになり、翌年にはシニアで三位、とう

とう今年度は全日本チャンピオンになった。

そういう例は稀なことで、幼い頃からトップクラスだった選手が全日本チャンピオンにもなる、というのがよくあるパターンではあるけれど、佑兄ちゃんの例があるのだから、中学まで中の上レベルでも、シニアになる頃にトップレベルになれる可能性はあるのだ。

信兄ちゃんの言葉を聞いてみると、ずっと胸の中でもやや漂っていた霧みたいなのが、少しずつだけ晴れていくような気がした。

突然、信兄ちゃんは何かを思いだしたようにハッと目を見開いた。そして楽しげな笑みを浮かべて話し始めた。

「そやそや、輪がスケート始めたのはなあ、どうしても自分も滑るって言うてきかへんかったからなんやで」

「うそお、全然覚えてへんわ」

「そりや覚えてへんって。まだ二歳かそこらの頃やから。母さんといっしょにおれの練習を見にきたときにな、自分もリンクに入って滑りたい言うて泣きだしてたいへんやったんや。まだ二歳じゃ危ないし合う靴もないし、やっと一般営業が終わった後のリンクを、普通の靴のまま父さんとおれとで両手を引いて滑らせたのが、輪の初スケートなんやで」

「へえ、そうやったんや」

話を聞いてもやっぱり思い出せないけど、その光景を思

い浮かべると、なんだか心の中があつたかくなつて、なぜだか涙が出そうになつた。誰もいない広々としたリンクを、父さんと信兄ちゃんに両手を引かれてはしやぎながら滑っているおれ。リンクサイドの手すりに両肘を突くようにして、笑顔でそれを眺めている母さん。実際に見たわけじゃないのに、はつきりと映像が浮かんできて、胸が痛いほどの□に襲われる。

その少し後の、幼稚園時代のことも自然と思ひ出されてきた。やっとスリージャンプと簡単なスピンができるようになった頃。おれはいつも、練習についてきてくれた母さんに、得意になつて見せびらかしていた。母さんはいつも笑いながら、おおげさなくらいほめてくれた。そういうえばあの頃は父さんもいつも笑っていたっけ。

あの頃は、おれのスケートを見てくれた人みんなが、笑っていたような気がする。それは失敗を笑つたりしてゐるわけじゃなくて、誰もが心から楽しそうな笑顔で……。

「あつー！」
みんなが笑顔で見てくれたのは、それは、おれが心からの笑顔で滑っていたから？ じゃあ今のおれのスケートを見た人が笑顔にならないのは、おれが笑顔で滑ってないから？

なんかものすごく大切なことに気づいたような気がする。

85

90

95

100

105

おれの滑りを見た人に笑顔になつてもらうためには、おれが笑顔で滑ってなきやいけない。おれのスケートを楽しかって思つてもらうには、おれがスケートを楽しんでなきやいけないんだ。高い点数を出すにはどうしたらいいか、なんてことよりも、それがいちばん大事だったのに、そのことをすっかり忘れていた。

「信兄ちゃん、おれ……」

「どないしたんや？」

思わずコーヒー缶を握りしめて立ち上がったら、信兄ちゃんは不安げに眉を寄せておれを見上げた。今度は心配いらないうつて意味で首を横に振る。

「おれ、思ひだした。スケート始めたばかりのちっさい頃、めちやめちやスケートが好きやったこと。もう練習終わりやって、はよ帰るでえーって言われても、まだ滑ってたいって言うて泣きだすくらい大好きやったこと。そのこと、ずっと長いこと忘れてたけど……今でもやっぱリスケートが好きなんや。才能なんかなくても、一番になれなくつても、おれ、スケートが好きやねん……」

とびっきりの笑顔でそう言った。はずなのに、^⑥両目からポロポロと涙の粒がこぼれ落ちてる。おかしいな。思ひ出して嬉しいはずなのに、なんで泣いてんやろ。

信兄ちゃんもベンチから立ち上がって、おれのことぎゅっと抱きしめてくれた。ちよつと恥ずかしかったけど、

125

120

115

しばらくの間、懐かしい腕の温もりに身を任せていた。

(風野潮「クリスタル エッジ」(講談社)より)

※ ポジション：体勢。

※ 萎縮：縮こまって小さくなること。

※ シニア：上級。

問一

——線①「やめたいと思ったのは、それだけが原因じゃなかった」とありますが、輪がスケートをやめたいと思ったいちばんの理由を、文章中の言葉を使って六十文字以内で答えなさい。

問二

——線②「泣きそうになって目を伏せた」とありますが、このときの輪の気持ちとしてあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 兄にきちんと謝れない私の強さを、自分自身で腹立たしく思う気持ち。

イ どうしても兄に心配をかけてしまう自分の弱さを情けなく思う気持ち。

ウ 兄にうまく気持ちを伝えられないことがはげしくて仕方がない気持ち。

エ 兄を苦しませていたことに気づかなかった自分を、強く責める気持ち。

問三

——線③「大丈夫や。輪は自信持ってスケートを続ける」とありますが、

1 このように言う兄が今の輪のスケートにはどんなことが大事だと言っていますか。それがわかる一文をさがし、はじめの五字を書きぬいて答えなさい。

2 そのような兄の言葉を聞くうちに輪の心が変化する様子が、このあと比喻で表されます。その一文をさがし、はじめの七字を書きぬいて答えなさい。

問四

——線④「そして楽しげな笑みを浮かべて話し始めた」とありますが、その理由として最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 輪の初スケートのときの下手さと比べて、今はいかに上達しているかに気づかせたかったから。

イ 輪のスケートをみんなが心から応援していることを伝えて、少しでも勇気づけたかったから。

ウ 輪に、やる気に満ちていた頃の自分を思い出して早く元気になってもらいたかったから。

エ 輪に、自分がどんなにスケートを好きだったかということを思い出してほしかったから。

問五 □に入る言葉として最もふさわしいものを次か

ら選び、記号で答えなさい。

ア むなしさ イ 懐かしさ

ウ 悲しみ エ 喜び

問六 — 線⑤ 「大切なこと」とありますが、輪が大切だ

と気づいたのはどんなことですか。文章中の言葉を使つて五十字以内で答えなさい。ただし、「おれ」と

いう言葉を用いてはいけません。

問七 — 線⑥ 「両目からポロポロと涙の粒がこぼれ落ち

てる」とありますが、このときの輪の気持ちの説明しなさい。